

満洲文字の文字表をめぐって(3)

—満文原檔のモンゴル字と満洲字、a, eの末位形、iの字形—

吉池孝一 中村雅之

はじめに

中村：前回はメレンドルフの文字表の配列順は、満洲文字の十二字頭の字頭中の配列順に由来することを確認しました。ただし、二種の k, g, h (a, o, ū の前の k, g, h と、e, i, u の前の k, g, h) の扱いは十二字頭とメレンドルフは異なります。十二字頭は両者を離して配置します。それは音の違いを表わすためとおもわれます。メレンドルフは二種の k, g, h を一緒に配置します。それは文字表の構成を重視した処置とおもわれます。われわれの用いる文字表 (= 吉池 2022 で提示されたもの^①) は、メレンドルフにしたがい二種の k, g, h を一緒に配置するというものでした。

吉池：文字表にみられる位置による字形の異なりについて先ず検討しようということで、満洲文字につながる比較的早い時期の資料であるシリア文字をながめてみましたね。

中村：単語の位置による字形の異なりを議論する導入とはなったかもしれませんが。今回は満洲文字によって、この点を議論しようということでした。

使用する資料について

吉池：単語の位置による字形の異なりがどのように成立したかを議論するわけですが、まずは使用する資料について確認しましょう。

中村：満洲文字には、モンゴル文字をほぼそのまま利用した 16 世紀末 (1599 年) の「無圏点満洲文字」と、無圏点満洲文字に圏点 (◦や、などの記号) を付して満洲語音の区別に対応するよう改良した 17 世紀前半 (1632 年正月) の「有圏点満洲文字」があります。語の位置による字形の異なりは、直接には当時のモンゴル文字の在り方を受け継いだものでしょうから、モンゴル文字、特に 16 世紀後半のモンゴル文字と比較する必要があります。

吉池：古典期モンゴル語^②の資料によって作業をすれば文字表は作れるのですが、今われわれにその準備はありません。そこで、古典期モンゴル語の文字表との比較は今後の課題

① 吉池孝一 (2022) 「満洲字の文字表」『KOTONOHA』第235号(2022, 6, 30)、1-7頁。

② ポッペ(1954)によると、モンゴル文字は、ウイグル文字やソグド文字の特徴を残した 17 世紀までの先古典期 (the pre-classical) の文字と、16, 17 世紀の仏典の翻訳やその版木

として、ここでは『満文原檔』（2005年に清の太祖期と太宗期の檔案40冊を影印にして刊行したもの。『旧満洲檔』とも称する）^③を使用したいのですがいかがでしょう。『満文原檔』（2005）は当時の檔案を集成したもので、主には無圈点満洲文字で書かれた満文からなっているのですが、一部にモンゴル語文があります。

中村：それによって17世紀前半のモンゴル文字と無圈点満洲文字を比較しようということですね。そもそも『満文原檔』（2005）とはどのような資料でしょう。『』を付して『満文原檔』として提示されると、成書年のある書物、という印象を受けるのですが。

吉池：原檔は、明萬曆35年（1607）から清崇徳元年（1636）までの清の太祖（ヌルハチ）と太宗（ホンタイジ）の事績の檔案を糸綴じしてまとめたもので、1931年に内閣大庫から発見された37冊と1935年に内閣大庫から発見された同類の3冊と、合わせて40冊からなります。37冊の方には千字文の字号が天から露まで各冊に付されていて、康熙帝の諱を避けて玄字号はなく、1935年に発見された3冊には字号はありません。この40冊の原檔は、現在は台北の国立故宫博物院に所蔵されています。この37冊は、乾隆年間に重鈔され、無圈点本と有圈点本が作られました。乾隆40年に重鈔が始まった北京檔と、乾隆43年に重鈔が始まった奉天檔の二種があり、後者の奉天檔を1905年に内藤虎次郎が発見し「満文老檔」と命名し学会に紹介しました^④。

40冊の原檔の書写時期

中村：40冊の原檔の内容の最終部分は崇徳元年（1636）ですから、檔案が成ったのは、内容からみると17世紀前半であるとして、文字を検討する者としては現存する資料自体が書写された時期が気になります。書写された時期が後代であれば、後代の文字表記の習慣が反映している可能性もあります。

吉池：池上二良（1997）^⑤に、「現在の旧満洲檔、特にその無圈点字檔の各部分は、その時点に、ないしそれから間もない時期に書かれたものか、または後の書写であるかを改めて検討

による発行を通して整理され改良された古典期（the classical）の文字と、現代（the modern）の文字の3つに分けることができ、古典期に整えられた文字が現代につながるようです。Poppe, N. (1954) *Grammar of Written Mongolian*. Otto Harrassowitz, Wiesbaden. 本稿は1991年版による。

^③ 台北の国立故宫博物院所蔵の40冊の檔案を影印として出版したもの。最初1969年に同院より『旧満洲檔』全10冊として刊行された。その後、大判（A4）の影印として2005年に馮明珠主編『満文原檔』全10冊が国立故宫博物院所蔵から再度刊行された。

^④ 以上は松村潤（2001）『清太祖実録の研究』（東北アジア文献研究叢刊2）東北アジア文献研究会。「『旧満洲檔』・『満文老檔』」26-37頁による。

^⑤ 池上二良（1997）「語学資料としての旧満洲檔—漢語音の表記について—」『満洲語研究』汲古書院、242-257頁。もと『東方学会創立五十周年記念東方学論集』東方学会、1997年。

せねばならぬこともおこりうるだろう。」(242頁)、「語学資料としての旧満洲檔は、17世紀前半の資料として、満洲語ばかりでなく、また漢語の研究資料となる。」(243頁)とあります。

中村：17世紀前半の資料としていますね。根拠は何でしょう。

吉池：根拠は明示していませんが「追記」で次のように松村潤(1978)^⑥を紹介します。17世紀前半の資料とするのは、あるいは追記の内容と関わりがあるのかもしれませんが。

「追記 すでに、松村潤氏が、古文書学的見地から、『舊満洲檔』に収められている太祖朝の檔冊のうち、高麗紙に書いた檔冊は、おそらく太宗朝の天聰年間に作成されたものであり、一方、漢字で書かれた明の公文書の故紙を使ってその表あるいは裏に満洲字で書いた檔冊の作成年代は、天聰元年以前とみているのは、傾聴すべき見方であろう。」(257頁)。

中村：明代の公文書は40冊の原檔全体にどのように分布しているのでしょうか。

吉池：松村潤(2001)^⑦には、この40冊をほぼ時代順に配列し、各檔冊の内容を記して表にしたものがあり、それを引用すると次のとおりです。今、「記事年代」について年月が重複する部分に下線を施しました。また注記を【】で示します。

表1. 40冊の原檔の概略

No.	字號	料紙	圈点	記事年代
1.	荒字	高麗紙	無圈点	<u>萬曆 35 年 3 月～天命 4 年 3 月</u>
2.	昃字	高麗紙	無圈点	<u>萬曆 43 年 6 月～天命 5 年 9 月</u>
3.	張字	明公文紙	無圈点	<u>天命 6 年 2 月～天命 7 年 3 月</u>
4.	來字	明公文紙	無圈点	<u>天命 6 年 7 月～天命 6 年 11 月</u>
5.	辰字	明公文紙	無圈点	天命 7 年 3 月～天命 7 年 6 月
6.	列字	明公文紙	無圈点	天命 8 年正月～天命 8 年 5 月
7.	冬字	高麗紙	無圈点	<u>崇德元年 9 月～崇德元年 12 月</u> 【40. 宇字と同じ】
8.	盈字	明公文紙	無圈点	天命 8 年 6 月～天命 8 年 7 月
9.	寒字	明公文紙	無圈点	天命 9 年正月～天命 9 年 6 月
		高麗紙		
10.	収字	高麗紙	加圈点	天命 10 年正月～天命 10 年 11 月
11.	黄字	高麗紙	無圈点	<u>天命 11 年 5 月</u>

⑥ 松村潤(1978)「天命朝の奏疏」『日本大学史学科五十周年記念歴史学論文集』588-599頁。

⑦ 松村潤(2001)『清太祖實録の研究』東北アジア文獻研究會、28-29頁。

12.	宙字	明公文紙	無圈点	<u>天命 6 年 12 月～天命 11 年 8 月</u>
13.	附 1	高麗紙	無圈点	<u>天命 9 年正月、3 月、天命 11 年 7 月、8 月</u>
14.	洪字	明公文紙	無圈点	無年月（萬曆 38 年ムクン・タタン表を含む）
		高麗紙	加圈点	
15.	蔵字	明公文紙	無圈点	天命 8 年（投降漢官勅書）
16.	往字	明公文紙	無圈点	太祖朝無年月（八旗官員勅書・誓文）
17.	宿字	明公文紙	無圈点	太祖朝無年月（八旗官員誓文）
18.	露字	高麗紙	無圈点	太祖朝無年月
19.	致字	明公文紙	無圈点	太祖朝無年月（八旗官員誓文）
20.	無編號	明公文紙	無圈点	（斷片貼り混ぜ）
		高麗紙	無圈点	
21.	天字	高麗紙	無圈点	天聰元年正月～天聰元年 12 月
22.	歳字	高麗紙	無圈点	<u>天聰 2 年正月～天聰 2 年 4 月</u>
23.	閏字	高麗紙	無圈点	<u>天聰 2 年正月～天聰 2 年 12 月</u>
24.	陽字	高麗紙	無圈点	天聰 3 年正月～天聰 3 年閏 4 月
25.	秋字	高麗紙	無圈点	天聰 3 年 10 月～天聰 3 年 12 月
26.	調字	高麗紙	無圈点	<u>天聰 4 年正月～天聰 4 年 3 月</u>
27.	月字	高麗紙	無圈点	<u>天聰 4 年正月～天聰 4 年 5 月</u>
28.	雨字	高麗紙	無圈点	<u>天聰 4 年 2 月～天聰 4 年 5 月</u>
29.	雲字	高麗紙	無圈点	<u>天聰 4 年 3 月～天聰 4 年 4 月</u>
30.	騰字	高麗紙	無圈点	<u>天聰 4 年 3 月～天聰 4 年 5 月</u>
31.	呂字	高麗紙	無圈点	<u>天聰 4 年 4 月～天聰 4 年 6 月</u>
32.	暑字	高麗紙	無圈点	<u>天聰 5 年正月～天聰 5 年 7 月、11 月、12 月</u>
33.	餘字	高麗紙	無圈点	<u>天聰 5 年 7 月～天聰 5 年 9 月</u>
34.	律字	高麗紙	無圈点	<u>天聰 5 年 10 月</u>
35.	成字	高麗紙	無圈点	<u>天聰 3 年 10 月～天聰 5 年閏 11 月</u>
36.	地字	高麗紙	無圈点	<u>天聰 6 年正月～天聰 6 年 4 月</u> 【有圈点字作成】
			加圈点	
37.	附 2	高麗紙	無圈点	<u>天聰 6 年正月～天聰 6 年 4 月</u>
			加圈点	
38.	附 3	高麗紙	加圈点	天聰 9 年正月～天聰 9 年 12 月
39.	日字	高麗紙	加圈点	天聰 10 年正月～崇徳元年 8 月
40.	字字	高麗紙	加圈点	<u>崇徳元年 9 月～崇徳元年 12 月</u> 【7. 冬字と同じ】

吉池：料紙の分布と、無圈点字と有圈点（加圈点）の分布からみて、明の公文書を利用した部分は天聰元年以前（太祖朝）の書写になるもので、高麗紙を用いて記された部分は天聰年

間以後（太宗朝）の書写になるものであるという松村潤(1978)の指摘は、細部にわたる検討は必要ですが妥当なものでしょう。

中村：40冊の原檔は17世紀前半に書写された資料という前提で利用するということですね。ところで、表1の「記事年代」の詳細を確認していないので、確かなことは言えないのですが、ずいぶんと年代が重複しています。これではとても整理された文書とは思えません。

吉池：表1は37冊の原檔をほぼ年代順に並べ直したものです。それでも重複しています。これを基にして乾隆年間に重鈔がなされ無圈点字と有圈点字の檔冊がそれぞれ一揃え作られたのですが、松村潤(2001)によると、重鈔する段階で重複部分は調整され削られたとのこと^⑧。この乾隆年間の重鈔本の資料となった37冊の檔冊自体は、その後バラバラになってしまった。それを表1のように並べ替え太祖と太宗の年代記という体裁に仕立て上げ『満文原檔』（『旧満洲檔』）という書物として出版したということです。

中村：刊行された書物として『旧満洲檔』（1969年）と『満文原檔』（2005年）とがあり、その刊行書の資料として国立故宮博物院に所蔵されている40冊の原檔があるということですね。それでは14世紀前半に書写されたと推定し得る40冊の原檔により、モンゴル文字と無圈点満洲文字を検討しましょう。

「満文原檔」所収のモンゴル語文書

中村：「満文原檔」にはモンゴル語文が含まれているわけですが、これまでどのような研究がなされているのでしょうか。

吉池：『満文原檔』（2005年）所収のモンゴル語文書によってモンゴル文字を整理し、「満文原檔」の無圈点満洲文字と比較した先駆的研究として早田輝洋(2011)「満洲語と満洲文字」^⑨があります。その後2015年に、栗林均・海蘭(2015)^⑩が『満文原檔』（2005年）所収のモンゴル語部分（一部に満洲語も含む）の全影印とモンゴル文字の詳細な研究と文字表を出しました。後者によって、影印でモンゴル文字のすべてを確認することができるようになったので、モンゴル文字についてはここでは栗林均・海蘭(2015)を参照することにします。なお、

^⑧ 松村潤(2001)「【乾隆期満文老檔の：対談者補】無圈點本では原檔にみられる記事の重複部分を削り、改刪塗抹された箇所は訂正後のものを採用しているのであるから原檔の原型とは著しく異なっており、原檔の多くが省かれている。」(36頁)。

^⑨ 早田輝洋(2011)「満洲語と満洲文字」『言語教育フォーラム第24号 言語の研究Ⅱ—ユーラシア諸言語からの視座—』大東文化大学語学教育研究所、1-35頁。

^⑩ 栗林均・海蘭(2015)『『満文原檔』所収モンゴル語文書の研究』（東北アジア研究センター報告第17号）東北大学東北アジア研究センター。

栗林均・海蘭(2015)によると、天命6年(1621)から天聰10年(1636)の間に、満洲側とモンゴル側で交わされた交渉に関するモンゴル語の檔案が47件含まれるとのこと。

「満文原檔」のモンゴル文字の文字表

吉池：「満文原檔」のモンゴル語文のモンゴル文字の母音部分を栗林均・海蘭(2015)より引用すると次のとおりです。

表1. 「満文原檔」所収モンゴル語の母音文字表(栗林均・海蘭2015による)

	頭位形	中位形		末位形		分離形
				(1)	(2)	
a	ᠠ	ᠡ		ᠢ	ᠣ	ᠤ
e	ᠢ			ᠤ	ᠥ	
i	ᠣ	ᠤ		ᠨ		
o	ᠤ	ᠨ		ᠮ		
u						
ö	ᠮ ᠮ	(1)	(2)	ᠯ		
ü		ᠮ ᠮ	ᠮ			

*a, eの末位形(1)は子音字b, k, gの下。(2)はそれ以外の子音字の下。

*ö, üの頭位形は二種。出現の条件は不明。古典式モンゴル文字では左側の一種のみ。

*ö, üの中位形の(1)は第一音節で二種。出現の条件は不明。古典式モンゴル文字では左側の一種のみ。(2)は第二音節以降。

中村：上の表1を、次節に挙げる無圈点満洲文字の表2と比べると合わない箇所が幾つかあります。満洲文字のa, eの末位形は一種であるが、モンゴル文字は二種であること、満洲文字にはiの中位形に二本線の字形があるが、モンゴル文字にはiの中位形として二本線の字形がないことでしょうか。

「満文原檔」の無圈点満洲文字の文字表

吉池：表2は早田輝洋(2011)「満洲語と満洲文字」にある無圈点満洲文字の文字表の母音部分を引用したものです。これは「満文原檔40冊」の荒字檔と戻字檔と洪字檔を資料としたもので、高麗紙を使って書かれています。

中村：先の議論によると、高麗紙で書かれた部分は天聰元年以降に書写されたものの、無圈点文字で書かれていても、有圈点文字が普及した天聰6年以降に書写された可能性も考えなければなりません。知らず有圈点字が混じり込んでいる可能性もあるので、無圈点の文字

資料としては注意が必要ですね。ところで、表2をみると、a, eの末位形は「右向き」で一種類のみです。それに対して「満文原檔」のモンゴル文字は「左向き」と「右向き」の二種類あります。有圈点満洲文字も「左向き」と「右向き」の二種類ですから、表2の無圈点満洲文字とは明らかに異なります。どういうことでしょう。

表2. 「満文原檔」の無圈点満洲文字の母音

	転写文字	頭位形	中位形	末位形	独立形
<1>	a				
<2>	e				
<3>	i		子音の下 母音の下		
<4>	o {o u}				
<5>	ü {u ü}		第1音節で子音の下		

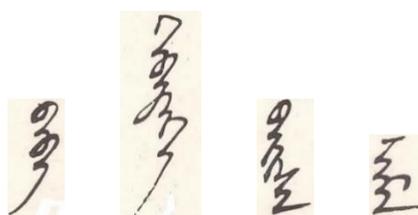
吉池：表2は修正が必要です。早田輝洋(2011)が使用した資料と同じもの(辰字檔)によりaとeの末位形の語例の一部を示すと次のとおりです。末位形には二種類認められます。

-a の例

-e の例



amba dasaha arara



babe hebedehe beise seme

無圈点満洲文字表の修正版

吉池：私の手元に辰字檔を資料とした廣祿・李學智(1971)^①があり、冒頭に影印が図として6枚付されています。それによって字形を確認して簡便な文字表を作ってみました。網羅的ではないですが、参考にはなるでしょう。なお、廣祿・李學智(1971)の無圈点満文のローマ字表記は、メレンドルフの有圈点新満文のローマ字翻字を利用したものです。問題は指摘されていますが^②、ここでは廣祿・李學智(1971)に依ります。

^① 廣祿・李學智(1971)『清太祖朝老滿文原檔(第二册辰字老滿文檔册)』(中央研究院歷史語言研究所專刊之五十八)臺灣：中央研究院歷史語言研究所、中華民國六十年。

^② 早田輝洋(2011)は「筆者の『満文原檔』の満洲語の研究の一つとして、無圈点表記がどの

表 3. 「満文原檔」の無圏点満洲文字母音表の修正

有圏点新満文のローマ字	有圏点新満文に対応する無圏点満文の字形				
	頭位形	中位形	末位形		独立形
a			(1) 左向き b の下	(2) 右向き k, h, l, m, n, r, s, w の下	
e			 b, k, g, h の下	 d, j, l, m, s, r, w の下	
i		 子音の下	 母音の下	 b, k, g, h の下	 属格
o					
u					
ū	 (u) —	第 1 音節 (u) (ū)	第 2 音節以降 (ū)	 (ū)	

*無圏点満文では、a, e の中位形・末位形、o, u の頭位形・中位形・末位形の区別はない。o, u の中位形・末位形と、ū の中位形第一音節右側と末位形との区別はない。a, e の末位形は資料の制限により見出せない。有圏点新満文の ū と無圏点満文の対応が異なるため、無圏点満文の字形に対応する有圏点新満文のローマ字を丸括弧()で示した。

中村：表 3 の無圏点満洲文字は、表 1 のモンゴル文字とほぼ同じですね。後の有圏点の満洲文字も並べて確認したいものです。

ように有圏点表記になっていくのか、その推移の過程を詳細に追う、ということがある。転写方式もすべてその目的に適ったものでなければならない。全面的な無圏点表記から、一部の有圏点表記になり、最終的に完全な有圏点表記に到着するまでに、どのように進んだかを見るためには、その変化を如実に反映し最終的に“自然に”有圏点表記になる転写法であることが望ましい。翻字は相応しくないし、無圏点表記なのに将来の有圏点表記の区別を先取りした表記は役に立たない【メレンドルフ式を応用した廣祿・李學智 1971 のローマ字表記を指すのであろう：対談者注記】。しかし、同時にその無圏点表記が“後の”有圏点時代のどの形に当るのかを示すことは有用であろう。」(23 頁)とし、無圏点表記用の独自の転写ローマ字によって表記する。

吉池：初回の対談で出した文字表を再度出すと次のとおりです。

表 4. Windows フォントによる文字表

■ 母音

翻字と発音	初頭の字形	中間の字形	末尾の字形	単独の字形
a[ɑ]	ㄐ	ㄑ	ㄒ ㄓ b, p, k, g, hの下	ㄔ
e[ə]	ㄒ	ㄓ t, d, k, g, hの下 ㄑ	ㄒ t, dの下 ㄓ b, pの下 ㄑ k, g, hの下	ㄔ
i[i]	ㄐ	子音の下 ㄑ 母音の下 ㄒ 母音の下 ㄑ*	ㄒ b, p, k, g, hの下 ㄑ	ㄓ * ㄔ 名詞語尾
o[o]	ㄑ	ㄒ	単音節末尾 b, p, k, g, hの下 ㄓ 母音の下 ㄔ 多音節末尾	ㄕ
u[u]	ㄑ	ㄒ t, d, k, g, hの下 ㄑ	単音節末尾 b, pの下 ㄓ* 多音節末尾 ㄔ t, dの下で単音節末尾 k, g, hの下 ㄕ t, dの下で多音節末尾 ㄔ	ㄕ
ü[o, u]	ㄑ	ㄒ	ㄓ	ㄕ

※i の中間字形の「母音の下」には両形があるが、これは文献による異なりであるという。単独字形に「名詞語尾」と付記したものは、名詞語尾 i が語幹から離されて書かれた場合の字形である。

※o の末尾の注記「単音節末尾 b, p, k, g, hの下」は「単字の末尾で。ただし b, p, k, g, hの下でしかも末尾ではすべてこの字形」の略記。u の末尾の注記「t, dの下で単音節末尾 k, g, hの下」は「t, dの下で且単字の末尾における特別の字形。なほまた k, g, hの下でしかも末尾ではすべてこの字形」の略記。両者は注記の表現が異なる。他もこれに準じる。

中村：まず用語の確認ですが、単語の語頭・語中・語末などに用いられる字形を上表 4 ではそれぞれ「初頭の字形」「中間の字形」「末尾の字形」「単独の字形」としますが、議論の便宜のため、表 2 や表 3 に合わせて「頭位形」「中位形」「末位形」と呼びませんか。今後、他に表が出てきて異なる用語を使用している場合も表 2 や表 3 に合わせましょう。

吉池：先に挙げた表 1 のモンゴル文字と、表 3 の無圏点満洲文字と、表 4 の有圏点満洲文字の末位形を比べると下記のようになります。なお、モンゴル語の転写には k, g と q, γ の二種あるのですが、満洲語のメレンドルフ式翻字は k, g, h の一種しかないので、両者を並べて議論するときには不便です。そこで[]で括った音声が付すことにします。この音声記号は、気音の有無や声の有無については無視した概略です。調音位置の前[k]か後[q]かという点を示すための便宜とを考えてください。母音 a, e の字形の出かたをまとめると次のとおりです。

「満文原檔」のモンゴル文字（17 世紀前半）

左向きの a ʾ : b の下のみ。*q[q], γ [g]の下は分離形で左向き。

右向きの a ʾ : b 以外の子音の下。*q[q], γ [g]は除く。q, γ の下の a は分離形のみ。

左向きの e ʾ : b, k[k], g[g]の下。

右向きの e ʾ : それ以外の子音の下。

「満文原檔」の無圏点満洲文字（17 世紀前半）

左向きの a ʾ : b の下のみ。*k[q], g[g]の下は右向き。

右向きの a ʾ : b 以外の子音の下。*k[q], g[g]を含む。

左向きの e ʾ : b, k[k], g[g], h[x]の下。

右向きの e ʾ : それ以外の子音の下。

有圏点満洲文字（比較の便宜として e を示す圏点の点は付さない）

左向きの a ʾ : b, p, k[k], g[g], h[x]の下。*k, g, h は漢語声母の表記用の新文字。

右向きの a ʾ : b, p, k, g, h 以外の子音の下。*k[q], g[g], h[h]を含む。

左向きの e ʾ : b, p, k[k], g[g], h[x]の下。

右向きの e ʾ : それ以外の子音の下。

中村：モンゴル文字で「左向き」の a が q[q], γ [g]の下で分離形として出現する点は、無圏点満洲文字と異なりますが、それ以外は、「左向き」と「右向き」の二種の別れ方は同じで、無圏点満洲文字はモンゴル文字を受け継いでいるとすることができそうです。無圏点満洲文字と有圏点満洲文字では、新たに作られた漢語表記用の k, g, h の扱いが有圏点で加わった点を除き、両者は同じであり、有圏点満洲文字は無圏点満洲文字を受け継いでいます。

ところで三者の末位形は、頭位形や中位形とだいぶ異なりますね。表 1 のモンゴル文字の a と e の末位形は、無圏点満洲文字を経由して有圏点満洲文字に引き継がれるわけですが、

そもそもモンゴル文字の「右向き」と「左向き」の字形がどのような経緯で出てきたのか気になります。

吉池：ポッペ(1954)が提示する先古典期モンゴル文語^⑬の文字表を挙げると次のとおりです。

表 5. 先古典期モンゴル文語の母音文字（イ、ロは対談者加筆）

Initial	Medial	Final	Tran- scription
ᠠ	ᠠ	ᠠ ^イ ᠠ ^ロ	a
ᠡ	ᠡ	ᠡ ^イ ᠡ ^ロ	e
ᠢ	ᠢ	ᠢ	i
ᠣ	ᠣ	ᠣ	o u
ᠥ	ᠥ ^イ ᠥ ^ロ	ᠥ	ö ü

*表 5 のイロの違いについてのポッペ(1954)の説明はない。

中村：表 5 の、a, e の末尾 (Final) のイとロはどのような違いでしょう。

吉池：この表では明瞭ではありませんが、イの方は上の字との接続線の突き出しが最上部に少々あります。そのようなイとロの字形の違いは服部四郎(1946)^⑭で確認できます。それ以外に違いは無く、縦に長い字形であるという特徴についてはイもロも変わりがありません。

縦長と、左右に向く字形

^⑬ 先古典期の時期について、ポッペ(1954)は“The pre-classical period extends from the very beginning to the seventeenth century.”と述べ、最初期から17世紀までとする。栗林均(2014)には「主として木版刷りの仏典に体现されたモンゴル文語を「古典式モンゴル文語」と呼ぶが、これに対してそれ以前のモンゴル文語を「前古典期」（あるいは「先古典期」）モンゴル文語と呼んでいる。15・16世紀に属するモンゴル文語資料はほとんど知られていないので、「前古典期モンゴル文語」は、実際には13・14世紀の「中世モンゴル語」の時代のモンゴル文語を指している。古典期に木版仏典のために整えられた字体にたいして、前古典期のモンゴル文字はウイグル文字の字形を保っているので「ウイグル式モンゴル文字」と呼ばれる。漢蒙対訳『孝経』はウイグル式モンゴル文字で書かれた先古典期モンゴル文語の典型的な文献資料である。」(1頁)とある。

^⑭ 服部四郎(1946)『蒙古字入門』東京：文求堂。『服部四郎論文集 第二巻 アルタイ諸言語の研究Ⅱ』（三省堂、1987年）所収。

中村：先古典期の縦に伸びた a, e と、表 1 のモンゴル文字の a, e の末位形(1)(2)は大きく異なります。先古典期の縦長の字形が、17 世紀前半のモンゴル文字では(1)のように「右向き」になったり、(2)のように「左向き」になったりするわけですが、どのような経緯でこれほどまでに字形が変化したのでしょうか。なお、16 世紀の古典期モンゴル文語の文字も同様でしょうが、信頼のおける資料によって文字表を作り確認したわけではありません。古典期モンゴル文語の文字については後の課題です。

吉池：ポッペ(1954)は、表 5 の先古典期モンゴル文語の母音文字の a, e の末尾のイとロの縦長の字形は、十分なスペースがある場合の字形であると述べます^⑮。

中村：そうすると、十分なスペースがない場合は別の字形になるということでしょうか。

吉池：その点についてポッペ(1954)には明瞭な説明はありませんが、漢語とモンゴル語が対訳となった『孝経』が参考となります。これは先古典期モンゴル文語の典型的な資料とされます。漢蒙対訳『孝経』の文字を表にしたものが吉池孝一(2006)にあり^⑯、母音部分をみると次の表 6 のとおりです。

表 6. 漢蒙対訳『孝経』の母音文字

番号	転写	字形			
		初頭	中間	末尾	単独
1	a				
2	e				
3	i				
4	o u				
5	ö ü				

^⑮ “In ancient manuscripts and in old xylographic editions of the pre-classical period, the letters differ from their present equivalents. Final a, e, n, and d, in cases where there remains too little space in the line for the following word but too much for the word terminating in any of these, are represented by the final forms occupying the entire space left in the line. These can be seen in the table given in section 82.” (25 頁)

^⑯ 吉池孝一(2006)「蒙文孝経の字母表」『KOTONOHA』第 38 号(2006, 1, 30)、17-20 頁。

no. 1 「a」: 末尾 b) と c) は、版木の下端に位置した時に用いる臨時的な字形 (以下、「下端専用字」とする)。末尾 b) には「t, d」の後の例がある。末尾 c) には「b」の後の例がある。単独 b) は下端専用字。

no. 2 「e」: 末尾 b) と c) は下端専用字。末尾 b) には「č, t」の後の例がある。末尾 c) には「k, g」の後の例がある。単独 b) は下端専用字

no. 5 「ö, ü」: 中間 a) は語の第一音節に使用する。第二音節以降は中間 b) が用いられ「o, u」と同形となる。

【※注の no. 5 「ö, ü」は吉池孝一(2006)に欠落している。いま補う。】

中村: 表 6 をみると、a, e の末尾と単独における縦長の字形は通常のもので、「右向き」や「左向き」の字形は、版木の下端に位置し、スペースに余裕がないときの臨時の字形ということですね。

吉池: つぎの図 1 は『孝経』の第 24 葉です。栗林均(2014)^⑩に掲載された影印の一部によるものです。

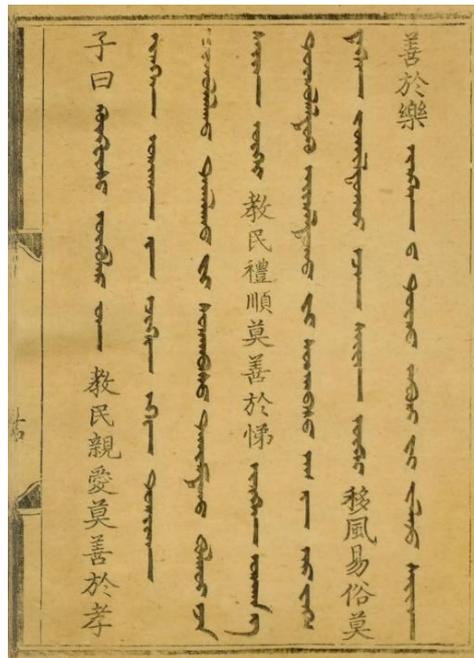


図 1. 漢蒙対訳『孝経』栗林均(2014)による

中村: 左から 3 行目下端の ača の a は「右向き」ですが、6 行目 3 語目の ača の a は縦長ですね。4 行目下端の単独の a は「左向き」ですが、2 行目 3 語目の単独の a は縦長となっています。

^⑩ 栗林均(2014)『孝経—モンゴル語古訳本』(東北アジア研究センター報告第 12 号)東北大学東北アジア研究センター。

吉池：スペースに余裕がないときの左右に向く臨時の字形を、「満文原檔」のモンゴル文字（17世紀前半）では、全文の単語の末尾に利用してスペースの節約を図ったということでしょう^⑧。問題は「右向き」と「左向き」の字形がどのような条件においてでるかということです。aとeについて、表8の漢蒙対訳『孝経』と表4の「満文原檔」のモンゴル文字を比べると次のようになります。

漢蒙対訳『孝経』のモンゴル文字（先古典期）

左向きの a ᠠ : b の下の例がある。

右向きの a ᠠᠨ : t, d の下の例がある。

左向きの e ᠡ : k[k], g[g] の下の例がある。

右向きの e ᠡᠨ : č, t の下の例がある。

「満文原檔」のモンゴル文字（17世紀前半）

左向きの a ᠠ : b の下のみ。*q[q], γ [g] の下は分離形で左向き。

右向きの a ᠠᠨ : b 以外の子音の下。*q[q], γ [g] は除く。q, γ の下の a は分離形のみ。

左向きの e ᠡ : b, k[k], g[g] の下。

右向きの e ᠡᠨ : それ以外の子音の下。

中村：漢蒙対訳『孝経』のモンゴル文字の「左向き」がでる条件と「右向き」がでる条件は、「満文原檔」のモンゴル文字の条件と矛盾しません。そうであるならば、漢蒙対訳『孝経』のモンゴル文字の語の末尾における a, e の版木下端の臨時的な「左向き」と「右向き」の字形の区別は、「満文原檔」のモンゴル語をとおして、無圈点満洲文字と有圈点満洲文字に受け継がれたと言ってよいかもしれません。

次に無圈点満洲文字の、i の二種の中位形を検討しましょう。

無圈点満洲文字の二種の中位形

吉池：次は「満文原檔」の無圈点満文の母音 a と e の後の二本線の i の語例です。

 gaibi 占領して  beile 貝勒（爵位）

中村：無圈点満洲文字も有圈点満洲文字も、子音の後で一本線の i、母音の後で二本線の i となっており同じです。表1のモンゴル文字を見ると、一本線の i のみですから、無圈点満

^⑧ 栗林均・海蘭(2015)の13-16頁において、a, eの末位系と分離形に出てくる「左向き」と「右向き」の字形のバリエーションを確認することができる。

洲文字の二本線の i がどこから来たかということが問題となります。表 1 には現れませんがモンゴル文字の語中の yi なのでしょうね。

吉池：そうだとおもいます。なお、早田輝洋(2011)「満洲語と満洲文字」にもモンゴル文字と満洲文字の二本線の i について言及があります¹⁹。「満文原檔」のモンゴル語文には二本線の i のように見える次の例があります。



qayiralagsan (愛しんでくれたこと) 4冊 69頁 6行



eyin (このよう) 9冊 211頁 8行

上に示したローマ字表記はポッペ(1954)の方式によるローマ字転写です。ポッペは母音 a, e 等の下の二本線を yi とし、ayi と eyi などと表記しますが、先端が跳ねる y ㄣを使用するわけではありません。これらの語の現代モンゴル文語の表記をレッシング(1960)²⁰の辞典や『蒙漢詞典(増訂本)』(1999)²¹で確認すると 、 とあります。なおレッシング(1960)や『蒙漢詞典(増訂本)』は ayi, eyi とはせず、ai, ei と転写します。

無圏点満洲文字の母音の後の二本線の i は、モンゴル語を表記したモンゴル文字に倣ったものでしょう。

i の小さな末位形

中村：表 3 の無圏点満洲文字の母音表には、i の末位形に、大きな字形と小さな字形があります。これは表 4 の Windows フォントによる有圏点満洲文字と同じですね。もっとも表 4 のフォントはやや形が異なりますが。

吉池：次に挙げるように、b, g, k, h 以外の子音と母音の後の i は比較的大きな字形で、b, g, k, h の後、特に b の後では小さな形の i ができます。これは b や g, k, h の筆勢の影響なのでしょう。

¹⁹ 蒙古語 sayin と満洲語 sain について「蒙古語では sa の次の 2 画をそれぞれ別の字母 y と i として転写し、満洲語ではその 2 画の全体を母音字母の次の i 字母として転写するのが一般的である。」(9 頁) とする。蒙古語の一般的な転写 (ポッペ 1954 の方式) と満洲語を並べて紹介する。もっとも、満洲語の二本線の i がモンゴル語の表記に倣ったものであると述べているわけではない。

²⁰ Lessing, F. D. ed. (1960) *Mongolian-English Dictionary*. Berkeley and Los Angeles.

²¹ 内蒙古大学蒙古学研究院蒙古語文研究所(1999)『蒙漢詞典(増訂本)』内蒙古大学出版社、呼和浩特。



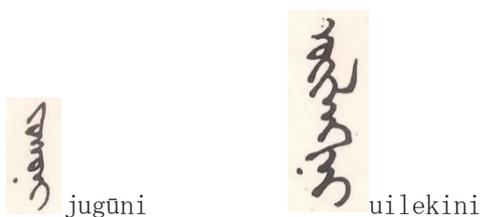
中村：“筆勢”というのはbやg, k, hの右から左下に払う字形を利用してiを書くため自然に小ぶりになるということでしょうか。

吉池：bの後では、あるいは、小さな字形とすることが既に定まっている（意図して小さな字形としている）ような気がします。g, k, hの後では、意図せずに、それこそ筆勢により自然に小ぶりな字形となっているということではないかと想像しています。

iの頭位・中位形と末位形

中村：b, g, k, hの後以外の末尾のiは、比較的大きく、頭位形と中位形とはだいぶ異なるようにみえます。これは、iの中位形の下に続く部分が丸みを帯びた、ということでしょうね。

吉池：そうだと思います。次に挙げる jugūni の末位のiの右部分はそれほど丸まっています。これが更に丸みを帯びれば、uilekini の末位のiと近似した字形になりそうです。このように下に続く部分が丸みを帯びて末位の字形ができたとすれば、iの字形は頭位・中位・末位に大きな違いはないということになります。



中村：これで、満洲語文の文字表の、単語の位置による母音の字形の異なりのうち、a, eの字形の問題、iの中位形の問題を検討しました。今回はここまでとし、次回は母音調和とそれに関連する文字について話し合しましょう。